

**「学力パワーアッププラン」を推進し、基礎・基本の確実な定着を図る
～授業との関連を工夫したパワーアップタイム 130 の効果的活用を通して～**

伊勢崎市立境島小学校

主題設定の理由

伊勢崎市 2007 教育構想は学力パワーアッププラン（子どもと学校と家庭が力を合わせ、学力向上を目指すプラン）を始め、5 つのプランにより「学力向上」と「豊かな心の育成」を目指している。本校（伊勢崎市立境島小学校）は 18 年度に引き続き、19 年度も学力パワーアッププランに重点を置き、学習習慣を身につけた、基礎・基本の確実に定着した児童の育成を図るために愛燦々プラン（学校、家庭、地域の協働で生徒指導の観点から子どもを育てるプラン）と連携させながら研究を進めたいと考えた。

18 年度、本校は伊勢崎市 2006 教育構想の 5 つのプランの中から「学力パワーアッププラン」のトップランナー宣言校とし、基礎・基本の確実な定着を目指し研究を進めてきた。

指導力向上では、算数科の学習の過程に児童の「学び合い」の場を設定することを通して、意欲的に学習に取り組んでいける力をつけていくことで基礎・基本の確実な定着を図ってきた。また、教員一人学期 1 回（年 3 回）の研究授業・授業研究会の実施を始め、日常の授業改善に取り組んだ。その結果、算数の各学年の単元末テストの学校平均点は 92 点となり、期待平均点 82 点と比較して 10 ポイント上回った。また、児童に「多様な見方や考え方が育った」「基本的な計算能力が高まった」等の成果が見られた。このことにより、児童の算数の基礎・基本の定着は図れたと考える。

学習習慣づくりでは、「学年×10 分間」以上の家庭学習の徹底のため、家庭学習カードの工夫や授業中の学習習慣づくりなどに取り組んだ。12 月の学校評価では「学年×10 分間」以上の家庭学習が 88%の保護者ができているという評価を得た。年 3 回実施した土・日も含めた連続 7 日間の家庭学習の調査では、「学年×10 分間」をクリアできた児童の割合は、7 月は 35%、10 月は 65%、2 月は 77%にアップした。

伊勢崎式学力向上学習プリントの活用では、朝学習・計算コンテスト・夏休みの補充学習などで、積極的に活用した。伊勢崎式学力向上学習プリント活用アンケートの結果、国語の学校平均活用率は 90%で、算数は 104%だった。（全てのプリントを 1 回終わると 100%とした）

一方、課題として次の 3 点が残された。1 時間の授業から単元、学期まで長期的なプランで、計画的に進めていかないと習熟の時間がとれないおそれがあるので計画的に進める必要がある。伊勢崎式学力向上学習プリント活用は、国語は 100%を超えられなかった。また、計算コンテストの学年別の 1 回合格者の割合調査を年 3 回（15 回）続けてきたが、5 段階（4 級・3 級・2 級・1 級・名人）の難易度がはっきりせず基準がはっきりしなかった。学年で統一して伊勢崎式学力向上学習プリントのどれを使うか検討し計画的に実施すべきだった。本校児童は、日本の古き良き、伝統的な地域社会と協力的な保護者に守られ、素直にのびのび生活できている。反面、狭い人間関係の中で生活しているため、切磋琢磨する環境やよいモデルに恵まれず、競争意識が弱く力を伸ばしきれずにいる。

そこで、19 年度本校では、学習内容の習熟・定着や発展をねらいとした、一人一人を鍛える時間としてパワーアップタイム 130（15 分×9 コマ＝計 135 分の「帯学習」）を週時程表に設定し、算数の単元の学習と関連づけた伊勢崎式学力向上学習プリントを計画的に活用することや、国語の単元の学習と関連づけた読書の時間を設定するなどの工夫を通し、基礎・基本の確実な定着を目指すことにした。以上の理由により、本主題を設定した。

研究のねらい

国語・算数の単元の学習と関連づけた、計画的なパワーアップタイム 130 の活用を通し、

基礎・基本の確実に定着した児童の育成を図る。

研究の見通し

パワーアップタイム 130 の学習において、国語・算数の単元の学習と関連づけて計画的に伊勢崎式学力向上学習プリントを活用したり、読書の時間を活用したりしていけば、基礎・基本の確実に定着した児童が育成されるだろう。

研究の具体的内容

1 育てたい児童の姿

境島小の本年度の学校経営の努力点の 、 の概要は下記の通りである。

算数や国語の単元の配列を考慮し、単元の前後のパワーアップタイム 130 に伊勢崎式学力向上学習プリントを年間計画に基づき計画的に活用する、国語の単元に関連した読書や読み聞かせを計画的に実施する等、パワーアップタイム 130 を計画的に実施する。また、ねらい達成のための手だてを明確にした、教科書を十分活用した授業の実践により、基礎・基本の徹底を図る。（学力パワーアッププランの推進）
愛燦々プランとリンクさせた、「島っ子の約束」の指導の徹底による学習習慣づくりと授業のルールの徹底。
また、家庭学習の内容や方法を工夫し、家庭と協力しながら学習習慣の育成を図る。（「愛」燦々プランの推進）

、とも、学習記録、指導記録、家庭学習カード、アンケート、意識・行動調査等による計画的なデータや資料収集に努め、子どもの姿の変容についての検証を行う。

これを受け、育てたい児童の姿を次のように設定した。

育てたい児童の姿

基礎・基本の確実に定着した児童の姿

1 授業がわかる児童

(1) 国語の単元末テストが期待平均点以上の児童

(2) 算数の単元末テストが期待平均点以上の児童

2 集中できる児童

(3) 100 ます計算が 1 年は最後まで、2 年は 4 分以内で、3～6 年は 3 分以内で、できる児童

3 読書をする児童

(4) 1 年間の読書の量が昨年以上の児童

1・2・3 を支える、

4 学習習慣の身に付いている児童

(5) 「授業のルール」や「島っ子の約束」を守れる児童

(6) テレビは 1 日 2 時間以内で、「学年×10 分間」以上の家庭学習をする児童

2 方策

前述の「育てたい児童の姿」を具現化するため、次の 3 つの方策を考えた。

(1) 授業との関連を考えたパワーアップタイム 130 の工夫（方策 鍛える）

朝のすくすくタイム 8:20～35（月、水、木、金、週 4 日）の工夫

ア 国語の授業との関連を考えた読書タイムを実施する。

イ 国語の授業との関連を考えた学校支援隊による読み聞かせを低学年（1 年～3 年）高学年（4 年～6 年）に分けて毎週月曜日と木曜日に実施する。

ウ 国語の言語事項等の定着の場（「国語チャレンジ」）とする。国語の単元の学

習と関連づけた計画により伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して、年に12回実施する。

エ 集中して学習できる児童を育てる場（「計算チャレンジ」）とする。年に12回実施する。

昼のぐんぐんタイム 13：25～40（週5日）の工夫

ア 授業の内容の定着を図った習熟の時間として設定する。算数の学習と関連づけた計画により、伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して実施する。

ぐんぐんの時間 金曜日の6校時 14：30～15：15の工夫

ア 4年生以上の児童は金曜日（委員会、クラブのない時）の6校時に特設の時間「ぐんぐんの時間」を設け、発展的学習・補充的学習に充てる。年間11回（495分）実施。

境島小学校 パワーアップタイム130（15分×9コマ＝135分の帯学習）について

時刻		月	火	水	木	金
8:20~8:35	朝のすくすくタイム	読書タイム (1~3年は読み聞かせ)	集会	読書タイム	読書タイム (4~6年は読み聞かせ)	読書タイム (年3回の読書チャレンジ)
8:35~8:45	朝の会					
8:45~9:30	1時間目					
12:15~13:25	給食・清掃・昼休み					
13:25~13:40	昼のぐんぐんタイム	算数	算数	算数	算数	算数
13:40~14:25	5時間目					
14:30~15:15	6時間目					ぐんぐんの時間

(2) わかる授業の実践（方策 教える）

ねらいと、ねらい達成のための手だてを明確にし、教科書を十分に活用した授業の実践をし、内容の徹底を図る。

積極的な授業公開（年3回）と日常的な公開に努め、協働による授業改善を推進する。

(3) 学習習慣の育成（方策 習慣づける）

「家庭学習・生活カード」の活用による学習習慣の育成

ア 「家庭学習・生活カード」の内容の改善と全校での活用による「学年×10分間」以上の家庭学習の指導の徹底に努める。

イ 「テレビは1日2時間以内」による学ぶ環境づくり、習慣づくりに努める。

「鳥っ子の約束」の活用による学習習慣の育成

ア 「鳥っ子の約束」の内容の見直しと指導の徹底による、授業中における学習習慣づくりに努める。

イ 「鳥っ子の約束」「教師の約束」「保護者の約束」について年3回アンケートによる実態把握をし、結果を学級での指導や懇談会、学校・学級通信・地域への回覧等に活用し、学校と地域・家庭との連携を徹底する。

上記(3)の ア、イと のア、イの4つの具体的内容は、愛燦々プラン推進グループが企画・立案を担当する。しかし、 のア、イについては、研究の一環として取り組んだことから、以下(3)については のア、イのみの記述とする。

研究の方法

1 仮説

(1) 方策（鍛える）について

仮説：パワーアップタイム130における、国語の授業との関連を考え、読書タイムや学校支援隊による読み聞かせを実施することにより、読書量が増え、読書の幅が広がり、「読書をする児童」が育つだろう。また、児童の授業に対する意欲が高まり、「授業がわかる児童」が育つだろう。

仮説 : パワーアップタイム 130 における、算数の単元の学習と関連づけた計画により伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して実施する昼のぐんぐんタイムにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

仮説 : パワーアップタイム 130 における、国語の単元の学習と関連づけた計画により伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して実施する国語チャレンジにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

仮説 : パワーアップタイム 130 における、計算チャレンジにより、「集中できる児童」が育つだろう。

(2) 方策 (教える) について

仮説 : ねらいとねらい達成のための手だてを明確にし、教科書を十分に活用した授業をしたり、授業研究会において、「ねらい達成のための手だて」「教科書活用の工夫」の有効性を中心に検討したりすることにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

(3) 方策 (習慣づける) について

仮説 : 「家庭学習・生活カード」の内容の改善と全校での活用により、「学年×10 分間」以上の「家庭学習習慣の身に付いている児童」が育つだろう。

2 検証計画

6 つの仮説を以下の観点による数値によって検証する。

(1) 観点

・図書室の 1 人あたりの貸出冊数が昨年度以上 (読書カードののべページ数は、参考記録とする。)

・授業関連図書貸出率 (授業関連図書貸出冊数 / 全貸出冊数)

これらの数値から「読書をする児童」が育ったかどうかを検証する。

・国語の 1 学期から 2 学期までの単元末テストの平均点が期待平均点以上
この数値から「授業がわかる児童」が育ったかどうかを検証する。

(2) 観点

・算数の 1 学期から 2 学期までの単元末テストの平均点が期待平均点以上
この数値から「授業がわかる児童」が育ったかどうかを検証する。

(3) 観点

・国語の 1 学期から 2 学期までの単元末テストの平均点が期待平均点以上
この数値から「授業がわかる児童」が育ったかどうかを検証する。

(4) 観点

・100 ます計算について

1 年 たし算・ひき算 最後までできる 2 年 たし算・ひき算 4 分以内

3 年 たし算・ひき算・かけ算 3 分以内

4・5・6 年 たし算・ひき算・かけ算 3 分以内、わり算 4 年 6 分以内、5 年 5 分以内、6 年 4 分以内 この数値から「集中できる児童」が育ったかどうかを検証する。

(5) 観点

・児童アンケートを実施し、「国語の授業はわかりますか。」「算数の授業はわかりますか。」という質問に対し、「わかる」または「だいたいわかる」と答える児童が 90% 以上
この数値から「授業がわかる児童」が育ったかどうかを検証する。

(6) 観点

・テレビ視聴時間 1 日 120 分以内、平均家庭学習時間が全学年「学年×10 分間」以上
この数値から「家庭学習習慣の身に付いている児童」が育ったかどうかを検証する。

研究の経過と成果

1 研究の経過

3級 2級 1級 名人と問題の難易度を質的または量的に難しくしていく。

(ア)国語チャレンジ

出題内容は、伊勢崎式学力向上学習プリントの言語事項や文法や漢字とする。

国語チャレンジの予定

- 1 学期 6/15,6/22,6/29,7/6,(予備日 7/13)
- 2 学期 11/2,11/9,11/16,11/30,(予備日 12/7,12/14)
- 3 学期 2/15,2/22,2/29,3/7,(予備日 3/14)

国語チャレンジの展開

<準備> 国語チャレンジのテキストを作成・配布する。

<本時> 予定の級をテストする。

工夫 : 校長の合図で開始する。 工夫 : テレビ放送を利用する。

工夫、工夫により、全校一斉に学校体制での取り組みであることを児童に意識させ、意欲化を図る。

<事後> 合格したら、認定カード(図4)を校長のところへ持っていき合格印を押してもらい励みにする。不合格の場合は休み時間に再テストをする。

国語チャレンジ・認定カード			
学年		年・名前	
級	合格印	授業印	合格したテストは 効果的に活用しよう。 またまねはんこうを おしえてもらえますよ。
名人	/		
1 級	/		
2 級	/		
3 級	/		

図4 認定カード(国語)

(イ)計算チャレンジ

出題内容は、伊勢崎式学力向上学習プリントの100ます計算とする。

計算チャレンジの予定

- 1 学期 5/11(足し算),5/18(足し算),5/25(足し算),6/1(足し算),(予備日 6/8)
- 2 学期 10/5,10/12,10/19,10/26,(予備日 12/7,12/14)
- 3 学期 1/11,1/18,1/25,2/1,(予備日 2/8) 2・3学期の四則は、学年裁量とする。

計算チャレンジの展開

<準備> 伊勢崎式学力向上学習プリントの100ます計算用プリントを印刷する。

<本時> 校長のテレビ放送による合図で開始する。

100ます計算をする。終わったら担任が時間を伝え、プリントに記録する。

(時間があれば、担任の合図で2回目をする。終わったら担任が時間を伝え、プリントに記録する。)

隣同士交換し、答え合わせ:全部合っていれば公認記録。間違いがあれば参考記録。

2回のうち良い方の記録を認定カードに記入する。担任は記録をしておく。

<事後> 認定カードを校長のところへ持っていき印を押してもらい励みにする。

昼のぐんぐんタイム

内容は、単元の事前学習(復習)・事後学習(習熟)とする。

伊勢崎式学力向上学習プリントを単元の学習と関連づけた計画により実施する。

予定

- ・4月・5月は、第1学年の問題から前学年までの「さかのぼり指導」を徹底する。理由は、前の学年までの課題を復習しながら今の学年の課題を教えていくと、基礎が鍛えられ、2学期からの授業が楽になるからである。
- ・5月は、学級担任は、「昼のぐんぐんタイムの実施計画」(図6)をもとに、計画的に伊勢崎式学力向上学習プリントを用いたテキストを作成し、用意をする。
- ・6月~3月は、単元の事前学習(復習)・事後学習(習熟)のために、伊勢崎式学力向上学習プリントを単元の学習と関連づけた計画により実施する。

指導方法

<準備>

計画的に進めるために、学級担任は、「昼のぐんぐんタイムの実施計画」(図6)を作成し、算数科年間指導計画との関係を図る。

更に、計画的に進めるために、学級担任は、週案(図7)に伊勢崎式学力向上学習プリントの番号を毎日明記する。

を元に該当する伊勢崎式学力向上学習プリントの問題・答えを印刷し、テキストを作る。

<本時>

準備(30秒) テキストをする。(10分)
時間を計る。できない子には教師が教える。
答え合わせ(3分) 5時間目の授業準備(1分30秒)

ぐんぐんの時間

発展的な学習、補充的な学習の時間とする。

4~6年金曜日の6校時に実施(年間11回)する。
学習内容は伊勢崎市教育研究所作成「確認問題」や教科書の発展問題など45分間を有効に使える問題を中心にする。

(2) わかる授業の実践(方策 教える)

指導案の工夫と授業改善

- ア 普段から、ねらい・ねらい達成のための手だてを明確にし、教科書を十分に活用した授業をする。
- イ 公開授業の学習指導案は、「授業の視点」の部分でねらい達成のための手だてを明確にはっきりさせ教科書の活用の工夫を図り、授業改善を図るために本校独自の新しい書式を導入する。(図8)
- ウ 学期に1回、授業公開をする。校長・教頭は必ず参観し、参観できる職員は全員参観をする。
- エ 公開授業を参観する職員は、授業の視点として、手だての有効性の検証を中心に授業参観をする。

授業研究会の工夫

- ア 公開授業の授業研究会は、手だての有効性の検討を中心に話し合う。効果的であったと判断された手だてを抽出し、校内で実践することにより指導力向上を図る。
- イ 授業研究会は、参観後の印象が新鮮なうちに実施することが大切と考え、忙しい日程をやりくりし、公開授業当日の放課後に30分間限定で必ず実施する。

<表1> 授業研究会において効果的であると判断された手だての例

学年・教科	単元	ねらい	具体的な手だて	期待される効果
1年 算数	いくつといくつ	10の構成の理解を確実にする。	最後にカードゲームを活用した習熟の時間を15分設ける。	10の補数を体を通して暗記できる。
2年 算数	3けたの数	1000未満の数の数え方と、唱え方や書き方を理解する。	机に位取りのテープを貼って位取り板を作っておく。	ブロック操作から数を数字で表す(記数法)に理解しやすい。
3年 算数	水のかさをはかる	かさについての興味を広げることができる。	水のかさを測定する時に、必ず見積もりをしてから行う。	見通しをもって考えを進める態度を育てることができる。

(3) 学習習慣の育成(方策 習慣づける)

図6 昼のぐんぐんタイムの実実施計画

図7 週案

図8 本校独自の「授業の視点」

「家庭学習・生活カード」の活用による学習習慣の育成

- ア 家庭学習の内容は、宿題、自主勉強、読書とする。
- イ 「家庭学習・生活カード」の内容は、宿題、自主勉強、読書以外に、テレビ視聴時間・睡眠時間・朝御飯摂取の欄を設けて、家庭生活習慣についても自己評価をし、規則正しい家庭生活習慣を意識させ身に付けさせていく。
- ウ 実態に応じてイをふまえ、学年ごとに「家庭学習・生活カード」(図9)を作成し、児童は毎日記入し、毎日ふりかえる。但し、1年生は保護者が記入する。
- エ どの学年も、最低「宿題(分)」「自主勉強(分)」「読書(分)」「家庭学習時間合計(分)」「テレビ(分)」「睡眠時間」「朝御飯摂取」という項目を「家庭学習・生活カード」に設け指導していくこととした。
- オ 担任は、「家庭学習・生活カード」を毎日チェックし、児童を励まし、実態把握をする。
- カ 宿題について、「毎日出す」「習熟的な内容を中心にする(読み、書き、算数)」「内容を工夫する」という3点を学校体制で全学年で実施していく。

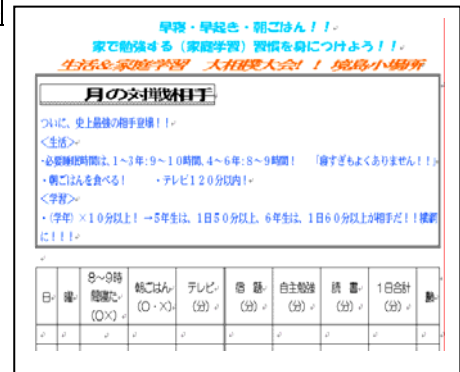


図9 家庭学習・生活カード(5・6年用)

2 成果

(1) 仮説 について

パワーアップタイム130における、国語の授業との関連を考え、読書タイムや学校支援隊による読み聞かせを実施することにより、読書量が増え、読書の幅が広がり、「読書をする児童」が育つだろう、また、児童の授業に対する意欲が高まり、「授業がわかる児童」が育つだろう。

表2より、1人あたりの貸出冊数は、昨年度の92.3%増、24冊増加し、児童の読書量は増えた。また、表3より、図書室所蔵の授業関連図書の数に偏りがあるので月によって授業関連図書貸出率に変動があるものの4月から10月までの授業関連図書貸出率が34.9%であることから読書の幅が広がったと考える。そして、表7より、国語単元末テスト平均点は92点であり、期待平均点82点に比較して10ポイント上回ったことから授業に対する意欲の向上が、国語単元末テストの結果に影響を与えていると考える。以上の結果から、本校の育てたい児童の姿の「3 読書をする児童」が育ち、「1 授業がわかる児童」が育ったと言える。参考までに、読み聞かせについての職員アンケート結果を載せる。

<表2>「読書10000ページの旅」の平均のページ数・図書貸出し冊数

	2学期(10/19)まで		
	平均のページ数	H19 貸出冊数(1人あたり貸出冊数)	H18 貸出冊数(1人あたり貸出冊数)
1年	****	***(**)	***(**)
2年	****	***(**)	***(**)
3年	****	***(**)	***(**)
4年	****	***(**)	***(**)
5年	****	***(**)	***(**)
6年	****	***(**)	***(**)
全校平均	3141	1882 (50)	1087(26)

<表3> 授業関連図書貸出率(授業関連図書貸出冊数/全貸出冊数)

月	4	5	6	7,8	9	10	4~10
1人あたり授業関連図書貸出冊数	1.4	3.2	2.1	5.1	0.4	7.4	19.6
授業関連図書貸出率(%)	26.2	33.7	27.2	37.8	5.1	79.4	34.9

<表4> Q 学校支援隊の方々による読み聞かせは、効果的だと思いますか。 <職員アンケート>

選択肢	4 そう思う	3 だいたいそう思う	2 あまりそう思わない	1 思わない	合計
度数	8	0	0	0	8
割合	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100%

(2) 仮説 について

パワーアップタイム130における、算数の単元の学習と関連づけた計画により伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して実施する昼のぐん

ぐんタイムにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

<表5> 算数単元末テスト 数字は、小数第1位を四捨五入して整数で表しています。

	単元末テスト	
	2学期平均点	2学期期待点
1年	**	80
2年	**	86
3年	**	80
4年	**	86
5年	**	82
6年	**	80
全校平均点	94	82

<表6> 伊勢崎式学力向上学習プリントの活用率

	2学期使用枚数	学年総枚数	活用率(%)
1年	***	140	***
2年	***	225	***
3年	***	194	***
4年	***	155	***
5年	***	129	***
6年	***	95	***
全校総数	1267	938	135

表5より、算数単元末テスト全校平均点は94点であり、期待平均点82点に比較して12ポイント上回った。この結果から、本校の育てたい児童の姿の「1 授業がわかる児童」が育ったと言える。

また、昼のぐんぐんタイムにおける伊勢崎式学力向上学習プリント（算数）の全校活用率は、現段階で135%（表6参照）であり、このまま活用を継続していきたい。

(3) 仮説 について

パワーアップタイム130における、国語の単元の学習と関連づけた計画により伊勢崎式学力向上学習プリントを活用して実施する国語チャレンジにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

<表7> 国語単元末テスト

	単元末テスト	
	2学期 平均点	2学期 期待点
1年	**	80
2年	**	86
3年	**	80
4年	**	80
5年	**	82
6年	**	81
全校平均点	92	82

<表8> 計算チャレンジ(100ます計算) 数字は、小数第1位を四捨五入して整数で表しています。

		平均タイム(秒)				
		四則	1回目	2回目	3回目	4回目
1年	たし算(36ます)		207	154	112	100
2年	たし算		320	265	244	225
3年	たし算		215	140	136	117
4年	たし算		205	192	168	157
5年	たし算		172	141	137	127
6年	たし算		140	130	110	96

表7より、国語単元末テスト全校平均点は92点であり、期待平均点82点に比較して10ポイント上回った。この結果から、本校の育てたい児童の姿の「1 授業がわかる児童」が育ったと言える。

(4) 仮説 について

パワーアップタイム130における、計算チャレンジにより、「集中できる児童」が育つだろう。

表8より、100ます計算（たし算）のタイムが、4回目には、1年は最後まで、2年は4分以内、3～6年は3分以内を達成し、検証計画で記した各学年の数値目標を達成した。この結果から、本校の育てたい児童の姿の「2 集中できる児童」が育ったと言える。

(5) 仮説 について

ねらいとねらい達成のための手だてを明確にし、教科書を十分に活用した授業をしたり、授業研究会において、「ねらい達成のための手だて」「教科書活用の工夫」の有効性を中心に検討したりすることにより、「授業がわかる児童」が育つだろう。

<表9> Q 国語の授業は、わかりますか、<児童アンケート>

選択肢	わかる	おぼつかない	おぼつかない	わからない	合計
度数	26	2	0	0	28
割合	92.9%	7.1%	0.0%	0.0%	100%

<表10> Q 算数の授業は、わかりますか、<児童アンケート>

選択肢	わかる	おぼつかない	おぼつかない	わからない	合計
度数	24	4	0	0	28
割合	85.7%	14.3%	0.0%	0.0%	100%

表 9、表 10 にあるように国語と算数の授業は「わかる」または「だいたいわかる」と 100% の児童が答えた。この結果から、本校の育てたい児童の姿の「1 授業がわかる児童」が育ったと言える。参考までに、授業研究会についての職員アンケート結果を載せる(表 11)。

<表 11> Q 授業研究会における「ねらい達成のための手だて」¹「教科書活用の工夫」²の検証は、授業技術の向上に役立っていると思いますが、<職員アンケート>

選択肢	そう思う	だいたいそう思う	あまりそう思わない	思わない	合計
度数	5	3	0	0	8
割合	62.5%	37.5%	0.0%	0.0%	100%

(6) 仮説 について

「家庭学習・生活カード」の内容の改善と全校での活用により、「学年×10分間」以上の「家庭学習習慣の身に付いている児童」が育つだろう。

表 12 より、1～3 年生までの低学年が、「学年×10分間」以上の家庭学習時間の確保ができた。また、高学年も 5 年生、6 年生が「学年×10分間」以上の家庭学習時間の確保ができた。

<表 12> 家庭学習・生活習慣 集計結果(平成19年9月1日～9月30日)

	平均タイム(分)					平均確保率・摂取率(%)	
	宿題	自主勉強	読書	読書(++)	テレビ視聴	睡眠確保率	朝御飯摂取率
1 年	**	**	**	**	**	**	**
2 年	**	**	**	**	**	**	**
3 年	**	**	**	**	**	**	**
4 年	**	**	**	**	**	**	**
5 年	**	**	**	**	**	**	**
6 年	**	**	**	**	**	**	**
全校平均	27	8	13	48	81	99.3	99.1

テレビ視聴時間については、全学年が検証計画で記した

数値目標である 120 分以内を達成した。学年に応じた睡眠時間の確保率や朝御飯の摂取率についても、各々全校平均 99.3%、99.1%という結果であり、4 つの学年が睡眠時間・朝御飯共に 100%となった。

以上のことから、本校の育てたい児童の姿の「4 学習習慣の身に付いている児童」が育ったと言える。

研究のまとめ

前記 - 2 . 成果として、(1)では、「3 読書をする児童」と「1 授業がわかる児童」が育ったと言えた。(2)では、「1 授業がわかる児童」が育ったと言えた。(3)では、「1 授業がわかる児童」が育ったと言えた。(4)では、「2 集中できる児童」が育ったと言えた。(5)では、「1 授業がわかる児童」が育ったと言えた。(6)では、「4 学習習慣の身に付いている児童」が育ったと言えた。よって、(1)～(6)から、本校が育てたい児童の姿である「1 授業がわかる児童」「2 集中できる児童」「3 読書をする児童」が育ったと共に、それらを支える「4 学習習慣の身に付いている児童」が育ったと言える。つまり、基礎・基本の確実に定着した児童が育成されたと言える。

このことにより、本研究では、パワーアップタイム 130 の学習において、国語・算数の単元の学習と関連づけて計画的に伊勢崎式学力向上学習プリントを活用したり、読書の時間を活用したりしていくことが基礎・基本の確実な定着には有効であることが確かめられた。

<参考文献>

- 『実践的研究のすすめ方』 群馬県教育研究所連盟編著 東洋館出版社(2001)
- 『学力を育てる』 志水宏吉 岩波新書(2005)
- 『基礎学力をつける 22 のテクニックと 5 つの柱』 杉田久信・久保齋 清風堂書店(2004)